

レポーター：学芸員の五十嵐さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：五十嵐さん、こちらの作品、同じ顔そして同じ恰好の男性が、6人。一度見たら、もう忘れられないような、絵ですね。

学芸員：そうですね。なんかアジア美術館が所蔵している作品の中でも、一番問い合わせも多いですし、注目の高い作品です。

レポーター：やっぱりそれだけ皆さんの心に残っているんですね。

学芸員：そうですね。心に残るだけではなくて、実はこれ中国の作品なんですけども。

レポーター：中国の。

学芸員：はい。中国の美術史の中でも非常にこう重要な役割を果たしたアーティストの作品なんですけども、ファン・リジュンというアーティストの方のこれ1992年に描かれた作品なんです。で、1992年という、今からけっこう前に、20年くらい前になりますけど、89年というのは、あの中国で天安門事件があって、非常にこうアーティストの人達が自由にいろんな表現をしたいって思っても、それがこう自由にできないってような社会的にけっこう抑圧された時代だったんですね。はい。で、そういうまあ社会的な中国の状況中で描かれたのが、こういう作品になるんですけども。

レポーター：同じ表情で同じ男性。何がその込められているんですか。

学芸員：ね、なんででしょうね。なんでじゃあ同じ顔をしてるんでしょうね。皆さんね。

レポーター：しかもちょっとなんか不気味っていいですか。

学芸員：そうですね。ちょっとこう。

レポーター：少し。

学芸員：にやにやね。笑っていますよね。じゃあ、そのすごい苦しい時代だったのに、にやにや笑ってて、その時代乗り越えられるかしら。

レポーター：皮肉にこう。

学芸員：不遜に笑うというか、にやっとするのをシニカルに笑うっていう風に。

学芸員・レポーター：シニカル。

学芸員：っていう風にまあ英語でいうんですけども、えーと、この作品を説明するときによくシニカルリアリズム。シニカルに、リアル、現実の世界をとらえるというようないい方をするんですけども、非常にこう苦しい中だと、まっすぐ向き合うととても生きていられない、シニカルに自分をちょっと客観的に見たりだとか、斜交いに見たりとかして、現実に向き合うみたいな態度があるんですね。でそれが、このおじさん達は、ポケットに手を突っ込んで、ちょっとこう斜めに立って。

レポーター：そうですね。

学芸員：それでなんか現実なんてみたいな感じで、ちょっとニタニタしながらいるんで

すね。あと、みんな同じグレーの服を着ていて、顔も同じだし、服もこっち。

レポーター：髪形もみんな同じですね。

学芸員：髪形も同じですね。うん、そうですね。

レポーター：スキンヘッドですか。

学芸員：スキンヘッドですよ。ということは、みんな、でも人間って一人一人違うのになんか同じなのはおかしいですよ。現実にはありえない。

レポーター：なんか違和感を感じます。はい。

学芸員：だけど、みんなが同じにしなきゃいけないときってあるじゃないですか。日本でもそれはあると思うんですけど、例えばすごく校則が厳しいとか。

レポーター：あーあー。

学芸員：制服だってみんな、こうねっ、昔だったらスカートが何センチ長いとか短いとか厳しく言われたと思うんですけど。それも、一つの守らないといけないルールっていうときもあるし、あんまり厳しすぎると、今度は抑圧になってしまうと思うんですけど、みんなおんなじ顔で、同じような姿で、同じ服を着ないと生きていけないような時代だったっていうのも、一つ見方としてはあるかなと思いますね。

レポーター：インパクトのあるこちらの作品。是非、足を運んでご覧になってみてください。